

ある。次に今日では發掘報告と云へば感興のないものとして、あまりに機械的に取扱はれやうとしてゐる。零碎な断片からも遺跡の復原を思ひ、一遺跡からもその文化全體、また他の文化との關係を考へようとする努力はあまり拂はれてゐない。本書はこの點に充分注意され、美事に實現されてゐる。具體的な復原の可否に就いてはなほ議論を免れないであらうが、その正しい態度だけは認めなければならぬ。断片を断片とし、記述の爲めの記述考古學となり了らうとしてゐる我が國の考古學界にはよい參考になるであらう。

本書は好評あるチャイルド教授の新石器時代の研究と云ふ點からばかりでなく代表的な發掘報告の一つの行き方を示すものとしても特筆に價する。

なほ本書には T. H. Bryce: *An Account of the Skara Brae Skeletons and their Probable Affinities*. S. Watson, *The Amnial Bones From Skara Brae*, の一文を附載してゐる (pp. xiii, 208, pl. I-X, Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd.)

〔水野〕

● Bibliotheca Orientalis der Asia Major.

所謂東洋學諸分科に關する新刊書籍、論文を集録した、一の東洋學文獻目錄とも云ふ可きもので、東洋學者、圖書館、大學研究室等の參考材料として「アジア・マヨール」會社の刊行したものである。特に東洋各地(日本・支那)遼羅に於て最近發表せられた東洋文化に關する諸論文、單行本の名を網羅するに努力

が拂はれてゐる。

第一部 Chineseische Zeitschriften und Bücher (三一—一九頁)は奉天の W. フックス博士の集録、第二部 Japanische Zeitschriften und Bücher (二〇—四〇頁)は東京の Das japanischdeutsche Kultur-Institut の報告に據るもので、共に一九三〇・三一年發刊のものを列擧してあり、吾人に取つては別に目新しいものを見出す譯ではない。本誌(史林)に就ては第十六卷第四號(昨年十月號)の三論文の題目が載せられて居る。

尤も第二部に於ては必ず收載せられねばならぬと思はれるもので、脱漏して居るもの若干あるようで、特に我國に於ける東洋史學に關する貴重にして有意義なる諸研究が殆ど收録せられて居ないのは遺憾である。例へば雜誌では、我國唯一の東洋學純學術誌「東洋學報」を脱し、又東方文化學院東京京都兩研究所より昨年中各々其一・二號を發表した「東方學報」の名も見當らない。單行本に至つては唯松井等氏東洋史精粹の一部のみを舉げ居るに過ぎないのは物足らないと云はざるを得ぬ。

第三部 Siamische Neuerscheinungen (四一—四七頁)、第四部 Orientalische Literatur (四八—六八頁)。吾人には、この附隨の意味で加へられた第四部の歐文東洋學文獻(近東關係のもの)は除外されて居る(の報告の方が寧ろ有益なのである。此には去年及今年中に發表せられた東洋學關係の書籍論文の名が三百近く分類列擧されて居るので、歐米東洋學界の趨勢を知る上にも、又參考書を選ぶ上にも非常に便利である。(六八頁 Asia

Major G. m. b. H. 發行 (Leipzig, 1922 Jun) (内田)

●蒙古源流箋證

嘉興沈曾植箋證
錢唐張爾田校補

最近北平から蒙古源流箋證なる書物が出版された事を知つて直に手に入れて見た。原稿締切までに間がないので詳細に目を通す暇がない爲に簡単に紹介して置かうと思ふ。

この書の序文を見るに沈曾植氏の死後張爾田氏がこれに補註を加へ更に王國維氏の校訂本(王氏校訂本の事は集刊陳寅恪氏の論文「蒙古源流の研究」中に見えたるも未だ閲讀の便なかりしもの今この書によりてこれをも併せ見る事を得るを喜ぶものである)を得てこれをも参照して居る様である。

從來世に通行せる欽定蒙古源流が誤字脱漏甚しくして讀むに堪へない事は周知である(蒙古書社の譯註蒙古源流の刊行によつて幾分は補はれたるも)。さきに内藤博士が盛京文淵閣藏四庫全書本によつて校訂せられたる書物と欽定本のそれとを比較してその誤脱の餘りにも甚しいのに驚くのである。甚しきに到つては七八行の脱漏すらある程である。然るに此の度刊行されたる蒙古源流箋證は私の調べ得た限りに於ては内藤博士の校訂されたるものと殆んど一致して居る様に思はれる。従つてこの書は略完全に近いものと思つて差支ないものと考へる。この書の出現によつて容易にかゝる完本に接する事が出来る様になつたのは蒙古源流を讀むものにとつて大變な便宜と言はればならぬ。その上蒙古源流に註を附して刊行されたのは本書を以つて

嚆矢とするであらう。

今試みに註の二三を見るに卷五に於いて問題の阿魯汗を明の記録に見える阿台汗に阿魯克台を阿魯台に比定したる等は可ならんも(滿鮮地理歴史研究報告十二卷和田清氏)元良哈三衛に關する研究(參照)額勒維特穆爾に關して額勒維即明史之鬼力赤譯改鄂勒審者也などは如何であらうか。(同上參照)

一體漢譯の蒙古源流は蒙古語の原文から直接漢譯せるものにならずして初め滿洲文に翻譯したるものを更に漢譯したるものなる事は蒙滿漢三體の文を比較すれば明である。而も漢譯は滿洲文を譯する事忠實であるが蒙文とは多少の出入がある(何れ詳細に發表の機會を有すると思ふから今省略する)。従つてこの蒙古源流箋證の註に於てこれ等蒙文の源流を參照したならばより以上啓發される所があつたであらうと思はれる。

要するにこの書は從來の欽定本の面目を一新したる點に於て又其の註を附せる點(註に關しては尙檢討を要するは勿論なれども)に於て苟も蒙古史研究者は一書を備へて然るべきものと信ずる。(京都叢文堂取次)(山本)

●福岡縣史資料 第一輯

福岡縣立圖書館長伊東尾四郎氏が縣の嚆託を受けて蒐集編次せるもの。まづ卷頭に參考書目を挙げその主なるものに就いて解題して後、神代以後持統朝までの史料を編年體に掲げ、次で有名な宗像の一筆一切經、五條家文書等中世の史料を載せ、轉